

人権啓発アニメーション

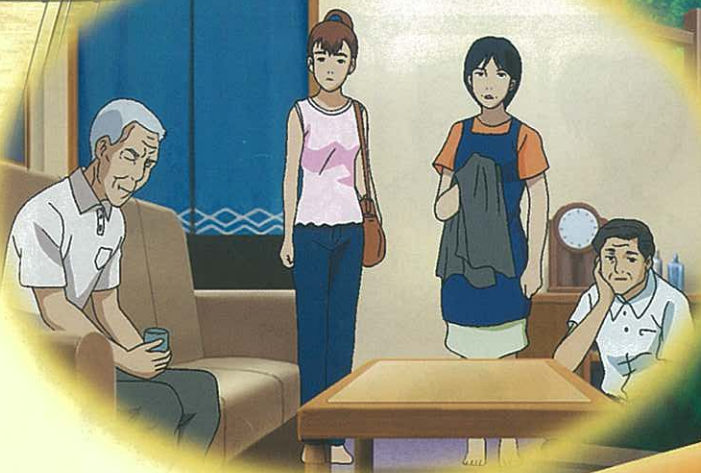
# 夢のつづき

16ミリ版 278,250円(税込)

ビデオ版 84,000円(税込)

[C#7381]

※字幕版もあります。[C#7382]



■企画:北九州市 北九州市教育委員会 北九州市人権問題啓発推進協議会  
■制作:東映株式会社 ■アニメーション制作協力:A-LINE  
■プロデューサー:鐵田幸人/喜多香織 ■声の出演:木村はるか/高橋伸也 (ほか)  
■監督:小島多美子 ■脚本:山上梨香 ■音楽制作:蟠龍寺スタジオ  
●16ミリ版/ビデオ版(16ミリ、ビデオの字幕入りもごさいます)

## 一人ひとりの人間がかけがえのない存在 北九州市人権啓発映画制作委員長 柿嶋 讓

自分の介護をめぐって言い争いをする子どもの声を聞いて、母親のソヨコは、「私が悪いです」「私が死ねばいいんだ。もう、死にたい」と声をあげて泣き出します。年老いた人に、「もう、死にたい」などと言わせるほど悲しくてつらいことはありません。

ケアハウスの所長大熊花枝は、「人を支えるのは人ですからね。高齢者を敬い、思いやる気持ちがなくて……。認知症や寝たきりになっても、人間の尊さに変わりはない。それを伝えていかないと」「人が最後まで誇りを持って、自分らしく生きるのは、当たり前のことですから」と介護への熱い思いを吐露します。

一人ひとりの人間がかけがえのない存在であり、他の人をもって代えることができないのが人間の尊厳なのです。「高齢者のための国連原則(1991年国連総会で採択)」には、5つの領域と18の原則がありますが、その中に、尊厳と自己実現の領域が含まれています。

「恩を感じているのなら、これからの生き方で返せばいい。受け継いだ命を精一杯生きる。それが、最高の恩返しだ」徳治の言葉が結人の心に響きます。長年培ってきた高齢者の豊かな知識・経験は、これからの社会を背負っていく若者に生きる指針を与えることが可能です。

どのように生きたいか、自己実現の欲求は、どの世代にも欠くことの出来ないものではないでしょうか。結人が美月や牧子が、いや徳治がソヨコが「夢のつづき」を模索していくことでしょう。

【上映時間40分】



## 《ポイント》

- ・ 高齢者に対する人権侵害
- ・ 高齢者の介護
- ・ 世代間のふれあい
- ・ 高齢者の生きがい
- ・ 家族のきずな
- ・ 男女の固定的役割分担意識

## 制作のねらい

近年、急速な少子高齢化の進展により、総人口に占める高齢者の割合は大きくなる一方です。そうした中、高齢者に対する虐待や悪質商法などの人権侵害が社会問題となっています。長い間、社会に貢献し、家族に尽くしてきた人たちが、なぜ疎んじられ、時として人権を侵されることになるのでしょうか。

この映画は、家族の中で疎外感を抱く高齢者、認知症を患う高齢者、その介護に疲れ果てた高齢者や無気力な毎日を送る若者らが、世代の異なる者とのふれあいや、高齢者を支援するサービスの活用などで、家族のきずなを深め、生きがいを感じられる生活を送ることができるようになっていく様子を描いています。

人は必ず老い、肉体的・精神的衰えや病のため、認知能力が低下したり体の自由が利かなくなったりします。この作品を通して、高齢者の尊厳を守り、だれもが最後まで自分らしく生きることができる社会を実現するためにはどうしたらよいか…。自分自身の問題として考え、行動するきっかけにいただければ幸いです。

## あらすじ

中尾美月は、高齢者の訪問看護を担当する看護師。祖父・徳治と一緒に住んでいるが徳治とは折り合いが悪い。外では優しく高齢者に接しているが、足が不自由な徳治に対しては優しい言葉もなかなかかけられず、世話も母の牧子任せ。その母も実家の両親の世話で家を空けがちだ。

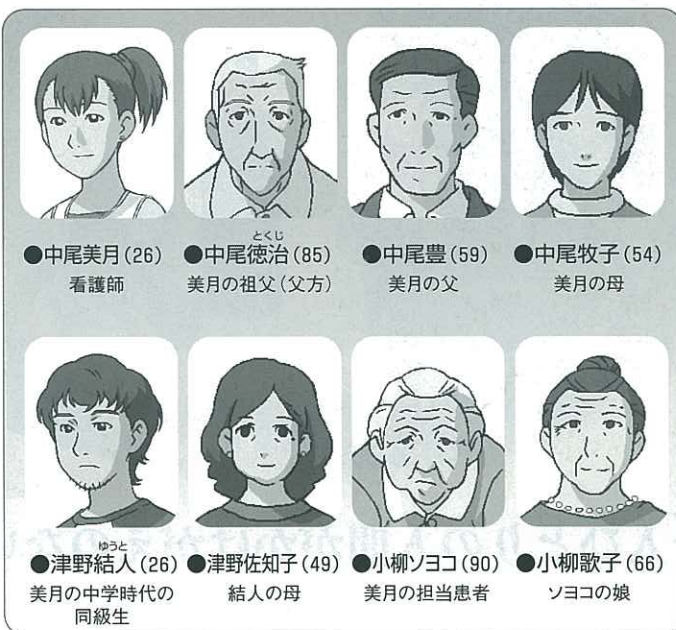
近所に住む青年・津野結人は「振り込め詐欺」騒動を通して、徳治と知り合う。結人は、会社を1年もたずに辞め、以来ニート状態を続けている。内向的で何に対しても無気力、無関心の日々を送っていた結人だが、たまたま助けた徳治の強引さに引きずられて、イヤイヤながらも相手をする。二人には、共通点があった。徳治は自分は息子一家にとって「役立たずの厄介者」だと思ひ込み、結人も自分は「一家の恥。もう、終わってる」と投げやりになっていた。徳治は、今は廃線となっている路面電車の運転手だった。電車大好き少年だった結人は興味津々。徳治も嬉しくなって自分が「懸命に生きてきた」時代のことを生き生きと語る。他に居場所のない二人は反発し合いながらも少しずつ心を通わせていく。

そんな徳治のもとに、旧友の松野大二郎から手紙が届く。若松のケアハウスで暮らす大二郎に会いに行きたい徳治だが、家族の反応は冷淡だ。美月も自分の担当患者の小柳ソヨコのことで頭がいっぱい。というのも、ソヨコを自宅で介護している娘の歌子の様子が最近変なのだ。

ひょんなことから、結人は徳治を「ケアハウス・えん」に連れて行くことになる。大二郎は徳治の昔の音楽仲間。神経を痛め車椅子生活だが、ギターをまた始めたという。徳治にも一緒に演奏をしないかと誘う。徳治は戦前に趣味でピアノを弾いていて、亡き妻との間に思い出の曲もあった。しかし、何十年もピアノから離れ、もう指も動かない。徳治は大二郎の誘いをいったん断る。しかし彼をもう一度鍵盤に向かわせたのは、結人だった。以前ピアノを習っていた結人は、徳治にピアノのレッスンを申し出る。結人にとってもそれは、再生のためのリハビリだった。

「自分にも、何かできることがあるかもしれない」「まだ終わってなんかいない」と思う二人。

美月はそんな二人の姿に心を動かされ、徳治への思いを改める。そして、コンサート当日「ごめんね」と「ありがとう」の思いを込めて、徳治に優しく語りかけるのだった。



P.



東映株式会社 教育映像部

<http://www.toei.co.jp/edu/>

●お買い上げは……

関東営業推進室 東京都中央区銀座3-2-17 〒104-8108 ☎03-3535-3631

関西営業推進室 大阪市北区梅田1-12-6 〒530-0001 ☎06-6345-9026

広島出張所 広島市中区八丁堀16-10 〒730-0013 ☎082-511-2066

福岡出張所 福岡市博多区中洲4-3-18 〒810-0801 ☎092-262-3101